

保育所における

施設児保育についての一考察

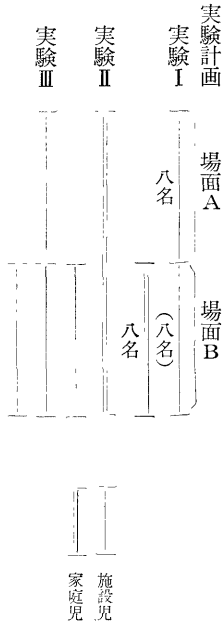
日本福祉大学 大森 弘 子

現在、多くの保育園において施設児と家庭と一しよに保育されている。しかし、実際の保育上には施設児と家庭児との身体的・精神的な差から起こる種々の問題があり、保育をゆがめている。

そこで、この研究は幼児の社会性について次の二点を明きらかにすることを目的におこなった。

実験は観察法でおこなったが観察は次の二面について実施した。

①社会的行動について(攻撃性、指導性、協力性、自己顕示性、依存性)
②遊びの型について (Parsons の社会性の発達による遊びの分類)



(以上を三日間にわたり二度くり返す)ひとり一分二回観察
対象 施設児一六名、家庭児一六名。

結果

1、施設児と家庭児との差……社会的行動については、場面に關係なく施設児は依存性が高く、家庭児は自己顕示性が高い。遊びの型は、多くの場合に家庭児の方が社会性が高い遊びが多い。

2、後から加わる施設児が最も社会性が低いあそびが多い。

3、施設児は前から遊んでいるグループならば、後から加わるグループが家庭児でも施設児でも、影響はうけない。

4、施設児が後から加わるグループならば、家庭児の中に加わるよりも、施設児の中に加わる方が、社会性の高い遊びが多くなる。

これらの結果に対し、施設児を家庭児と一しよに保育することを前提として考慮し、施設児に出来るだけ抵抗の少ない方法を考え、実際の保育に生かしてゆきたい。

在園時の記録と進学後の傾向

東京・神田寺幼稚園 昼間 光 威

福 永 かをり

石 村 紀 子

在園時の評価と進学後の傾向を比較調査し今後の保育の参考とする。主に学業状態を中心としてそれに伴う学習態度、行動面について検討した。調査にあらわれた傾向としては、在園IQと学業成績にはかなりの相関が見られるが、児童自身の学習態度、それに加えて周囲の条件、環境などによってその学習状態が左右されることが多い。学習状態を(A)学年ごとに成績が上昇しているもの、(B)学年を通して成績に比較的变化のみられないもの、(C)成績の下降しているもの、(D)学年により成績の上下の変化が大きいものの四つのグループに分け、そのグループを中心に学習態度、行動状態などを見た。その結果、学習態度と成績に大きな相互関係が見られた